

受賞者の横顔—仲田泰祐氏

ゼロ金利下の政策分析

審査委員 北尾 早霧

(経済産業研究所 上席研究員)

景気が悪化しそうなら政策金利を下げ、消費や投資を刺激して経済を軌道に戻す。このマクロ経済学の処方箋は、金利引き下げ余地のない低金利下ではうまく機能しない。ゼロ金利制約の問題は 2008 年の金融危機後、米国をはじめ先進諸国共通の課題として浮上した。

他国で成功した政策事例もなければ、頼れる実証研究もない。経験のない現象やショックに見舞われたとき、望ましい政策を探る道標となるのがマクロ経済理論だ。仲田氏は米連邦準備理事会 (FRB) において、ゼロ金利環境下での最適政策の理論構築と数量分析に取り組み、トップレベルの国際学術誌に多くの優れた論文を掲載してきた。

伝統的な金融政策が機能しない環境では平時とは異なるマクロ経済現象が起きる。仲田氏はゼロ金利制約と不確実性の相互作用をモデルに組み込み、それらがマクロ経済変数と政策効果に与える影響を分析。17 年の論文ではゼロ金利制約下における不確実性が景気悪化の効果を増幅させること、16 年の論文では不確実性のない場合に比べて最適な財政支出の規模が拡大することを明らかにした。

さらに、理論モデルに基づく数値計算によって具体的な分析結果を提示し、学術研究として高い評価を得るだけでなく、低金利化で効果的な処方箋を探る政策現場からも注目を浴びた。

経済理論を礎に現実の課題に挑み、効果的な政策発信を行う仲田氏の経験と能力は、コロナ禍においてもいかに発揮された。

仲田氏は東京大学の藤井大輔氏と共同で、感染症の動学に経済の要素を取り入れた疫学マクロモデルを構築。人々の動きを捉えるモビリティデータを通じて経済活動と感染動向を結びつけることで、緊急事態宣言解除のタイミングなど様々な政策シナリオによって感染者数や生産活動が中・長期的にどのように変化し得るか、見通しを示した。

経済と感染症の両分野を融合した数理モデルによる分析結果を提示したのは仲田氏らが日本で初めてで、メディアや政策現場の議論にも大きな影響を与えた。

また刻々と変化する感染状況を反映したタイムリーな政策分析を行うため、モデルを簡潔化しつつ、週単位の分析と丁寧な発信を行うことで、経済分析の機動性や発信手法の考え方に対しても一石を投じた。

精緻なマクロ経済理論に基づいた現実的な分析と政策提言が強く求められる中、仲田氏の分析は研究者に限

らず政策担当者からも注目されている。今後は特に専門の金融政策を中心としたマクロ経済の幅広い分野におけるますますの活躍を期待したい。